

夏の約束

鹿児島県立大島高等学校 二年 川畑 瑞希

「ハッピーバースデートウーひろとー。おめでとう。」今日、七月二十六日は僕の二個上の大翔兄ちゃんの誕生日だ。先週、一学期が終わって今日は夏休み五日目。ばあばの家で、お誕生日会をしている。

「大翔、むるでっかくなったやあ。いくつになったわけ。」

「じいちゃん、俺もう十歳なったんど。」

と言いなながらじいじは兄ちゃんにプレゼントを渡している。この誕生日会は僕がもっと小さかった頃から開いている。そして夏休みが始まって、先生のパパと看護師のママは忙しいから夏休みの間はじいじの家に泊まる。そんな僕とお兄ちゃんには、じいじの家に泊まる時にもう一つ楽しみがある。それは、

「ケムー。ケムー。どこー。」

パーティーの途中だったけど少しならバレないよね。ちよっと抜け出して、ばあばの機織り小屋に行つてケムを探しに行く。ケムっていうのは、身長が十五センチメートルくらいの手のひらサイズの毛むくじやら。ケムは自分のこと『ケンムン』って言うんだ。あつ。ケムだ。

「よお。陽翔。やんきやまたあんまんち来たわけな。わん、やーなんかぐるの楽しみにしとったんどー。」

えつと僕にはケムが何を話しているのかあんまり分からない。でも、楽しみにしてたってことでもいいのかな。

「うん。僕も兄ちゃんもケムと会えるの楽しみにしてたんだよ。僕たち、また今日からじいじの家に泊まるから相撲して遊ぼうね。」

ヤムは、相撲をするのが大好きみたいだ。初めて会った時も、兄ちゃんに相撲を挑んでいた。でも、体の大きさが違うから僕たちがケムと相撲する時は右手だけ使うというルールになっている。手の平がいたら僕らの負けで、ケムを持ち上げることは禁止だから、結構いい勝負になっている。この夏休み中に一回でいいからケムに勝つことが僕の目標なんだ。

「おい。陽翔。やー、さつきからおっかんに呼ばれとるがいかなでいいわけ。」

あつ。兄ちゃんがケーキのロウソク消すのか。いかなくつちや、

「ケム。また明日ね。おやすみ。」

と僕は家に戻って誕生日会を楽しんだ。

「陽翔。起きて。大変なことになった。」

ん。兄ちゃんがなんか叫んでる。どうしたんだろう。

「兄ちゃん。朝から大きい声出してどうしたの。」

「ケムがどこにもおらん。」

え。ケムなら昨日会って話したのに。どこ行っちゃったんだろう。って、え。あの木の所に登ってるじゃん。

「兄ちゃん。あそこにケムいるよ。何で見つけられなかったの。」

木の頂上にたどりついたらしいケムがこつちを見てニコニコしながら、手を振っている。兄ちゃんはまだ気づいてないらしい。木の側まで連れて行こう。

「兄ちゃん見て、ほら。ケム、ここにいるよ。」

ぱっとケムを見ると少し寂しそうな顔をしていた。

「何言ってるの、陽翔。嘘つくなっちは。どこにもケムおらんがね。もう俺、中に入るから。」

兄ちゃんは怒って家の中に入ってしまった。なんで兄ちゃんにはケムが見えてないの。こんなにも近くににいるのに。

「陽翔。わんは、やーが十歳になるともう見えんくなるっちよ。大翔は昨日なったがね、だからじゃが。」

ケムの瞳に少し涙が浮かんだように見えた。大翔兄ちゃんは僕が赤ちゃんの時には、もうケムと仲良しだったらしい。急にお兄ちゃんに見えなくなるなんて悲しすぎる。

「ねえ。ケム。もう一度、お兄ちゃんにケムが見えるようになる方法はないの。」

「うーん。あるっちゃあるが森の奥行かんばいかんど。」

森の奥の祠の中に丸い石がある。それを触りながら願いを口に出す。」

ちよつと怖いけど僕にもできそう。よっし。やってみよう。

「うん。僕行くよ。」

「したら、これ持って行きんしゃい。」

渡されたのは小さい勾玉。何だろう。でも、

「頑張るね。行ってきますす。」

ここが森の入口か。暗くて少し怖いけど、兄ちゃんにケムを見せてあげるために頑張る一歩足を踏み入れると色んな所から鳥のさえずりが聞こえてくる。一本道っぽいし、大丈夫。このまま行こうとしたら、

「え。ここで急に二本に分かれてる。」

どうしよう。ケムにここまで聞いてないよ。あ、勾玉出してみよう。すると、周りの鳥が、

「チュツチュツ祠はこっちだよー。」

と言ってるように聞こえた。びっくりして、勾玉を落とすと、また鳥のさえずりに戻った。そうか。これは、多分動物と話せるようになるためにケンムンが僕にくれたんだ。

その後、何度も迷いそうになりながらも、勾玉を持って、アマミノクロウサギやアカシヨウビン、アマミハナサキガエル達にいっぱい助けてもらいながら、やっと祠

に辿り着いた。やっところまで来られた。祠の中には、大きい丸い石があった。石に書かれている文字は読めなかった。僕の望みは、

「兄ちゃんにケムがまた見えるようにしてください。」
石に手の平をおいて大きな声で叫んだ。勾玉から眩しいほどの光が放たれた。頭の中で、

「陽翔は、本当に優しい子じゃが。」
という声が聞こえたように思った。

目を開けると、そこは、また、ばあばの家だった。そうだ。兄ちゃんは。

「陽翔。ケムと兄ちゃん会ったぞ。相撲もしたけど、陽翔によろしく。そしてバイバイ。って言って光に包まれて消えたよ。」

え。なんで、消えちゃったのケム。いやだよ。あつ。勾玉は？そう思ってポケットの中を探ってみると、あつた！取り出して、見てみると、

『わん、やーと会えてうれしかった。また、遊ぼうや。ありがたさまりよーた。』

って書いてあった。なんで、行かないでよ。

「陽翔。なんで泣いてるの。会ってないのか。大丈夫。そのうちまた会いに来てくれるよ。あと、俺とケムを会わせてくれてありがとう。」

そうだね。ケムと僕らの思い出はずっと心にある。また

会える日を楽しみにしているよ。
ケム、またね。必ず会おう。